

本疏 會本十本三十八ウ

如來者上釋竟神名不測力名幹用不測則天然之體深幹用則轉變之力大也。

此の意は、先づ如來と申すは、十方三世の諸佛二佛三佛本佛述佛の通號、正しくは本地三佛の御名にして、則ち上の壽量品の如來と一同で御座る。時此の本地の覺體は、開迹顯本の境智妙覺極果の本證にして、本有常住の十界俱體俱用の三身、實に權教迹門の所説とは一向永異で御座る。尙ほ等覺金剛心の菩薩の思慮分別にも及ばず、最も天然不測の妙體で御座る。則ち此の内體深遠の處をさして、神と名くるぞと云ふ事を、本疏に神名不測天然體深と釋し給ふぞと思召せ。次に力と申すは、正しく天然の妙體より外相に現じ給ふ十種の妙用で御座る。始め先づ廣長舌を出して梵天に至らしめ、亦無數色の光を放つて徧く十方を照し給ひ、さて御舌を收めて警欬彈指し給ふ音聲、諸佛の世界に秀で、其地六種に震動し、其の中の天龍八部悉く此の會を見奉つて大歡喜を生じ、尙亦諸天空中の聲に催され娑婆世界に向つて、一同に南無釋迦牟尼佛と唱へて華香瓔珞を散じ、珍寶妙物を供養し奉る時に、十方世界通達無礙にして一佛土となつて御座る。かやうに微妙不測の内證より、奇特の幹用を現じ給ふを則ち力と名くるぞと云ふことを、力名幹用轉變力大と釋し給ひて御座る。されば諸經の神通變

現のこと、或は一微塵の中大千の經卷、或は方丈室内の三萬六千の高座、須彌芥子相入の法門と、只理體一分の不思議にして、更に事理本有の妙用では御座らぬ、今則ち開迹顯本の大事現はれ、一切諸經の肝心末法下種の正體たる妙法蓮華經の五字を、本化六萬恒河沙の菩薩に付屬し給ふ故に、爾前迹門の席に會て之れなき處の、本覺無作の功德妙覺極果の神力を現じ給ふぞなれば、最も妙法蓮華經如來神力品と題するぞと思召せ。時その如來本果の功德宛ら本因行者の得分に歸することは、當品神力の至極本化付屬の詮要で御座る。爾れば有難いことには、面々我等知らず計らず、本門壽量品の南無妙法蓮華經と唱へ奉る、信心修行の當處則ち開迹顯遠の作用無作本有の神力にして、頓て佛道を成就せんこと疑ひないぞと、頼母しう思召て題目の御修行が肝要で御座る。

御書

内八二十五觀心本尊鈔
續遺九四六

此十神力以妙法蓮華經五字授與上行安立行淨行无邊行四大菩薩。前五神力爲在世。後五神力爲滅後也。雖然再往論之一向爲滅後。南無妙法蓮華經

妙法蓮華經屬累品第二十二

五六
作者 不詳

諸菩薩摩訶薩衆如是三反俱發聲言如世尊勅當具奉行唯然世尊願不有慮

所講の在處は、第七の卷屬累品の一文で御座る。時此品の中に三箇條の法門在します。第一は如來の付屬、第二は菩薩の領受、第三は事畢唱散と申す三段で御座る。某し披露の處は、第二の菩薩の領受と申す經文の下で御座る。

本疏 會本十本六十

從時諸菩薩下是第二領受。如世尊勅者領受大施主、
如來室意當具奉行領受無慳慳如來衣意願不有慮領受、
無所畏如來座意佛既三付菩薩三受皆如文

此の御釋の意は、先づ領受と申すは、世話にもものを能く合點致す事を領掌と申すが如く、領は領納とてとくと納得致す事、受は稟受とてものを能く受くることで御座る。時何様なる誠示を受け何か様なる義理を領受し給ふぞと申すに、以上の經文に佛諸の菩薩衆に告げ給ふ様は、如來は有大慈悲無諸慳慳亦無所畏能與衆生佛之智慧如來智慧自然智慧と説き給ひて、滅後末代に於て此法華經を弘通せば

必ず衣座室の三軌に住して、三身三諦三德三智等の圓融具足したる、法林の南無妙法蓮華經を弘通仕れと、三反迄もねんころに御付屬なされて御座る。是を此品の三反摩頂の惣付屬の法門と申す、其時諸の菩薩此の佛勅を聽聞し奉つて、信心肝に銘じ歡喜身に餘り、躬を曲げ頭を垂れ掌を合せ佛に向ひ奉て、異口同音に如世尊勅當具奉行と領受なされて御座る。此の領受の如世尊勅と申すは、上の大慈悲爲室如來の室に住しませうぞと云ふ領掌、當具奉行と申すは、上の無諸慳慳の如來の衣を著しませうぞと云ふ領掌、願不有慮と申すは上の亦無所畏の如來の座に坐しませうぞと云ふ領掌であるぞと申すことを、今の本疏に如世尊勅者領受大施主如來室意等と御釋なされて御座る。次に上に於て佛ねんころに三度迄御付屬なされた故に、亦た諸の菩薩も三反迄領受なされて有るぞと申す事を、本疏に佛既三付菩薩三受皆如文と釋し給ひ、かくの如く談すれば經文釋疏の句面も荒方聞えまして御座る。此の三軌の付屬三反の領掌は誰人の爲かと存すれば、今の經文に於未來世善男子善女人乃至使得聞知と説き給へば、滅後末代の當時各々我等が爲で御座る。然れば餘所外の義では御座らぬ程に、別して身に引き受けて有難く思召せ。尙此上に本門弘通の極談は廣略を捨て、壽量所顯の肝要たる、是好良藥の南無妙法蓮華經と修行し奉る信者行者は煩惱業苦の當體に、三軌三德を備へ、臨命終の夕には本有無作の開覺を成せんこと、決定として疑ひないぞと頼母しう思し召て、隨分信心に題目の御修行が肝要で御座る。

八方四百萬億那由陀の國土に充滿せさせ給し諸大菩薩身を曲低頭合掌し。俱に同時に聲をあげて如世尊勅當具奉行と三度まで聲を惜まずよばわりしかば。いかでか法華經の行者にはかわらせ給はざるべき。南無妙法蓮華經

妙法蓮華經藥王菩薩本事品第廿三

修師御述作

以神通力願而自燃身光明徧照八十億恒河沙世界其中諸佛同時讚言善哉善哉善男子是真精進是名眞法供養如來

所講の在處は、第七の卷藥王品で御座る。時先づ當品は苦行乗々と申して、廣く藥王菩薩の本事を宣べて弘通の導師を勸め、燒身燒臂の苦行を擧げて、衆生利益を成するが此の品の大意で御座る。

此文明一切衆生喜見頓捨一身次燒兩臂輕生重法命殞
道存舉昔顯今故言本事品

此の意は、今の藥王菩薩往昔一切衆生喜見菩薩と申せし時、日月淨明德佛に従つて法華經を聽聞し現一切色身三昧を證得なされて、歡喜身に餘り則ち神力を現じて、天より曼陀羅華摩訶曼陀羅華海此岸の旂檀の香を雨らして、淨明德佛を供養し給ふと雖も、尙ほ佛恩報じ難く飽き足らず思召し、所詮身を以て供養し奉らんとて、薰陸沈水のかほり妙なる諸香を服し、瞻蔔百華の微妙なる香油を飲み、天の法衣を以て容貌を纏ひ、諸の華香油を取つて身に塗り、頂に灌ぎ恭しく佛前に坐し、神通力を以て千二百歳の間、自ら全身を燃して供養し給ふ、是が燒身の行と申す。さて命終の後亦た二度び彼國に化生し、佛入涅槃の後御舍利を收めて、八萬四千の塔を起て、更に其の御前に於て七萬二千歳の程久しくも、百福莊嚴の臂を燒いて供養し給ふ、是が燒臂の行と申す、是を本疏に頓捨一身次燒兩臂と御釋なされて御座る。時如何なれば別の修行もなく、強ちに燒身燒臂の供養を修し給ふぞと申すに、是則ち喜見菩薩未だ等覺已還の薩埵として、般若實相の智火を運ばし、別屬一界の無明の身を燃して、法華經淨明德佛の果極の妙體へ向はせらるゝ、眞法甚深の供養で御座れば、實には燒くも燒かるゝも皆實相にして、供養するも供養せらるゝも俱に不可得の境界で御座る。さてこそ五陰の身は露塵ほど

も惜しからず、焼けて焼けて彌々法身を莊嚴し、無明の命は草の葉よりも軽く殞々て益々慧命を増益し給ふぞと云ふことを輕し生重し法命殞道存と御釋なされて御座る。然れば滅後末代の行者も、只管此深重の志を學び、妙法實相の功德を慕ひて、無量の怨嫉を蒙り三類の強敵競ひ起れども、努々退轉の心なく我不愛身命但惜無上道の金言に任せて、此經を弘通し佛恩を報じ奉れと、藥王菩薩の昔喜見菩薩たりし時の苦行を擧げて、今の導師を勸め給ふ御品なれば藥王菩薩本事品と題しますると云ふことを、擧げ昔顯し今故言し本事品と釋し給ふぞと思召せ。さては面々方々も、假令無量の災難ありとも些しも退く心なく、彌々強盛の信心を勵まして、朝夕に本門壽量品の南無妙法蓮華經と唱へ給ふれば喜見菩薩修行の功德にもかはらず、佛道を成せんこと疑ない一段ぞと頼母しう思召せ。

御書

内三十五、二十七、一各入道御書
續遠一七六

無量劫より已來六道に流轉して佛にならざりしことは。法華經の御爲に身を惜み命を捨ざる故ぞかし。されば喜見菩薩と申せし菩薩は千二百歳の間身を焼いて日月淨明德佛を供養し。七萬二千歳の間臂を焼いて法華經を供養し奉る。其人は藥王菩薩ぞかし。

南無妙法蓮華經

妙法蓮華經妙音菩薩品第廿四

作者 不詳

是妙音菩薩如是種々變化現身在此娑婆國土爲諸衆生說是經典

披露の御品は、聞えまする通り妙音品で御座る。時に此品を妙音品と名くる仔細は云何様ぞなれば

本疏 會本十末十一ウ

昔奉雲雷音王佛十萬種伎樂今遊化億土音樂自隨昔奉
八萬四千寶鉢今爾千道器眷屬圍遶

此の意は、先づ妙音の二字は妙なる音と讀みまする、此菩薩を妙音と名けますることは、十方世界に遊化し給ふに、若は聚洛城邑若は山谷曠野の末までも、自然と微妙の音樂御身に隨ふ故に、此德によつて妙音菩薩と名け奉ること御座る。さて此音樂は何として斯く御身に隨ふぞと申すに、昔此菩薩雲雷音王佛と申す佛世に出させ給ひし時、廣大の志願を立て、十萬種の伎樂を以て佛へ御供養なされ、又八萬四千の寶鉢を佛へ捧げ給ふ故に、此の宿因並に無上菩提の誓願に酬へて、開覺成就なされ

て後、十方世界に出でて衆生を御利益なさるに、微妙の音樂自然に御身に隨ひ、八萬四千の寶鉢は即ち八萬四千の道器眷屬と成つて、此の菩薩を圍遶するぞと申す御釋の意で御座る。さて此の菩薩昔雲雷音王佛に、伎樂と寶鉢との二種ばかり御供養なされて、かくの如き自然微妙の大果報を得給ひて有るかと思すに、經文には植衆徳本成就甚深智慧と説き、文句には昔得一切衆生語言陀羅尼、今以普現色身、以妙音聲遍吼十方、弘宣此經故名妙音品と釋し給ひて、但二種の供養のみに非ず、亦此法華經を聽聞なされ、法華三昧自在の業、一切衆生語言陀羅尼を得給ひし故に普現色身と申して、或時は地獄餓鬼畜生人天脩羅の形像を現じ、又は二乘佛菩薩の妙相を示し、三十四身に現じ、兎角衆生の樂欲に隨つて無量の色相を示し、不測の妙音を以て遍く十萬億土の中に、遊化して此法華經を弘宣し給ひて御座る。此の如く妙音の事を委しく説き顯はし給ひし御品なれば妙法蓮華經妙音菩薩品と題し給ふぞと思召せ。さては知ぬ妙音菩薩開述顯本の妙法を供養修行の功德に依つて、常修常證の菩薩界に安住して、微妙の神通を以て恒に一切衆生を利益し給ふなれば、各々我等も三世常住の法體萬善同歸の妙法、本地難思の本門壽量品の南無妙法蓮華經と唱へ給ふ行者なれば、臨終の夕には自他俱安同歸常寂の本意を遂げ給はんこと、決定として疑ひないぞと隨分信心に題目の御修行が肝要で御座る。

御書

内三十八、廿一、新編經意狀
縮遺九一五

一切法華經任其身如金言修行せば。慥に後生は不及
申今生も息災延命にして勝妙の大果報を得。廣宣流
布之大願をも可成就也。南無妙法蓮華經

妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第廿五

作者 不詳

問是觀世音菩薩一心稱名觀世音菩薩即時觀其音聲皆得解脫

披露の在處は、第八の卷觀音品で御座る。時先づ當品題號の主旨は如何様ぞなれば、此品に於ては行者の所念に隨つて、三毒七難を拂ひ二求兩願を満じて、幽冥不思議の利益をなし給ふ上、身には十三身を現じ、口には一十九種に法を説き、三業自在の應用を垂れ、設化無謀の顯益をなし給ふ慈悲甚重の大菩薩なれば、觀世音菩薩普門品と名くるぞと思召せ。扱て此の菩薩何れの國土、何なる淨土を接かとし給ぞと申すに、

文句

中道是應本也又一乘實相是所乘體也。

此御釋の意は、開權顯實開述顯本の妙法實相不測の理體に安住し給ふ時、此自行安住の理體を三土に相對せば、且く寂光土と名け、亦報應二身に約せば且く法身如來と名け奉る、法身寂光の身土は、二經所在皆常寂光と釋して、此法華經一部八卷廿八品が、觀音の自行自受法樂の住處、法身寂光の本國土ぞと思召せ。去る程に開權顯實開述顯本の妙法實相の理體に安住して、無緣の大悲を以て、十方法界の種々の機縁に應じて、普現色身の應用を示し、三毒七難を除き、二求兩願を滿じ、三十三に身を現じ、一十九種に法を説き給ふことも、徧へに自行性徳の妙法實相の力用ぞと思召せ。然れば、末世當今の各々我等、此法華經を持ち奉る則んば、三毒七難を除き、二求兩願を滿じ、現身說法の應用を施し、安樂自在の利益を成就せんことは、徧に本門壽量品の南無妙法蓮華經と唱へ奉る、信者行者に事限るぞなれば、有難い事には面々方々無始より己來、五道六趣に輪廻して、或時は互相殘害の身と生れ、或時は飢饉飢渴の苦みを受け、又は炯燃猛火の炎にむせび、適ま人間天上生れても、天上は五衰退沒、人間は四苦八苦に責められて、恒に苦む處に、此度生死の重苦を離れ、安樂自在の境界にならんこと、決定して疑い無い一段ぞと、頼母しう思召して題目の御修行が肝要で御座る。

御書

内廿六、四十五、下山御消息
縮遺一五八二

さては我等も本土に還りて何かせんとて、八萬二萬の菩薩のうち

に入り。或は觀音品に遊於娑婆世界と申して。此の土の法華經の行者を守護せんとねんごろに申せしかば。日本國より近き一閻浮提の内南方補陀落山と申す小所を釋迦佛より給ひて宿所と定め給ふ。南無妙法蓮華經

妙法蓮華經陀羅尼品第廿六

修師御述作

時釋迦牟尼佛讚藥王菩薩言善哉善哉藥王汝愍念擁護此法師故說是陀羅尼

所講の在處は、第八の卷陀羅尼品で御座る。時先づ當品題號の主旨は如何様ぞなれば、

文句

會本十末三十六

此翻惣持惡不起善不失

此の意は、陀羅尼は梵語此には惣持と翻じまする、元來此の陀羅尼は其の體何物ぞと尋ぬるに、則ち眞如實相に安住する佛智の妙用で御座る。凡そ九界の境界は、善惡共に迷中の善惡にして、佛界の

妙理より見る時は、皆一偏に届したる惡の全體で御座る。此れに應同して説き給ふ四味の經々の中には、一分圓融の法門ある様なれども、曾て二乗成佛を許さず、惡人女人を嫌ふて、十界皆成の妙理を顯さざれば、諸法實相一念三千の法門跡を削つて御座る。是れ偏に圓融中道の妙理を説き給はぬ故ぞと思召せ。されば華嚴阿含方等般若の席を重ねて、最早や衆生の根機熟し、決定説大乘の時到来り、靈山八ヶ年に始めて出世の大事たる妙法蓮華經を説き給ひ、一切衆生を皆悉く成佛得脱の素懷を得せしめ給ひて御座る。依つて只此眞實の經説に任せ、法華經獨り得道の大法ぞと無二の信心を勵まし、南無妙法蓮華經と唱へ給ふが則ち陀羅尼品の旨歸惣持の究竟で御座る。最も三乗の境界無量の所念は、當品陀羅尼の所治なれば惡不起善不_レ失と釋し給ひて御座る、惣じて法華經の行者の怨嫉災難を拂はんが爲に二聖二天十羅刹女等佛前へ進み出で、諸佛秘密の陀羅尼神呪を説き給ふぞと思召せ。然れば我等宿善厚うして、無量劫にも値ひ難き諸佛秘密の神呪たる、南無妙法蓮華經を唱へ奉るぞなれば、五番善神の擁護に依つて、無量の災難を拂ひ信心を増進し、娑婆即寂光の開覺を得んこと、頼母しい一段ぞと彌々信心に題目の御修行が肝要で御座る。

御書

内十六、五十六新譯鈔
縮遺九〇六

行者は必ず不實なりとも智慧はをろかなりとも身は不淨なりとも

戒徳は備へずとも。南無妙法蓮華經と申さば必ず守護し給ふべし。
南無妙法蓮華經

妙法蓮華經妙莊嚴王本事品第廿七

修師御述作

即鼻虛空高七多羅樹而白佛言世尊此我二子已作佛事以神通變化轉我
邪心令得安住於佛法中得見世尊此二子者此我善知識爲欲發起宿世善
根饒益我故來生我家

披露の御品は、第八の卷妙莊嚴王品で御座る。時先づ當品の大體は如何様ぞなれば、往古佛滅後末法の時分に、四人の法華經修行の比丘ありしが、世間の慣鬧を厭ひて山林にかくれ、幽に草庵を結びて日夜修行の志を勵み給ひて御座る。然るに月日積るに隨ひて、衣食乏しく氣力疲れて、雪を拂ふて薪を取れば手足龜り、岩を踏んで泉を汲めば肩疲れて荷ひ難きのみならず、十旬九飯の竈の煙り絶間勝に、朝飡空うして夕の命誠にさへ難き體になり給ひてある時に、一人の比丘仰せらるゝ様は、かくの如く飢寒に逼られては有待の身疲れ易く、妙法の修行も成就しがたく御座れば、三人は彌々修行の志を勵み給へ、我は爰を去つて衣食を求めて各に贈り奉らんとて、それより徧く國を轉り、里を過

ぎ門に立つて袂を開き、種々の物を乞ひ受けて悉く山中に贈つて、奴の主人につかふるが如く、數年の間所須を供養し、三人の修行を成就せしめ給ひてある、凡そ末法の行者其器堅からず、さなきだに五欲の情制しがたきに、常に聚洛城邑に交はり數々人間の聲色に觸れて、其心動かすまじき様は御座らぬ。されば此一人の比丘折りふし王城の邊りを通り、國王の行幸に行き遇ひたりしに、警蹕の聲いかめしく前驅隨身聲華こなやに列りし中に、七寶の輦高く耀いて見るにまばゆく、珊瑚の玉簾ほのかに垂れて限りなく床しきに、千車あたりを纏ひ萬騎跡に續いて、雷電地に轟き紅塵天に飛ぶ有様を、熟々身の衣破れ食乏しく、あまりに頼みなきに思ひ合せて、扱ても富貴の體哉と深く彼の光榮を羨みしが、功德の力則ち其所念に隨つてそれより世々人中天上の帝王と生れ、専ら微妙の快樂を窮め給ひて御座る。さて最後に妙莊嚴王と云ふ邪見の國王と生れ給ひしに、最早福力も盡きて次生には三惡道に落ち給はんことを、昔の三人の行者得道の智眼より明かに御覽じ、今ぞ古の恩を報せんと思召し、一人は淨徳夫人とて容顏端正の後に生れ、二人は淨藏淨眼の二子と成り、恩情愛欲の鈎を以て終に此王を勧め、生死の海を出離せしめ給ふ、是則ち其國王は今日の華徳菩薩、夫人は妙音菩薩淨藏淨眼は藥王藥上の二菩薩で御座る。かくの如く四聖の前縁を示し、殊には妙莊嚴王の得道の相を説き給ふ御品なれば、最も妙莊嚴王本事品と題するぞと思召せ。

文句

會本十末四十三

生雖未獲其理必臻靈瑞感通嘉名早立

此意は、先づ生雖未獲とは、凡そ妙莊嚴王は雲雷音王佛と云ふ佛の御在世に生れ給ふと雖も、其始は曾て佛化を受けず、只外道婆羅門を信じて甚だ邪見なりしが、淨藏淨眼の二子聰明の御子として、久しく六波羅密を行じ、諸の三昧に通達在し、則ち母の仰せを蒙り父の御前に種々の神變を現じ給ひしかば、此時始めて奇異の思をなし、前來の邪見を捨て、二子の本師雲雷音王佛に於て、信敬の心を發し給ひて御座る。爰に二人の王子本満足し歡喜に絶えず、更に淨徳夫人に乞ふて出家となり、尙父母を催して群臣眷屬と共に、音王佛の所に詣でて法華經を聽聞修行なされました。扱て其後に妙莊嚴王も同く出家し給ひ、法華經の修行八萬四千歳を経て、一切淨功德莊嚴三昧と云ふ微妙の證を得、諸の神變を現じ二子の善知識なること稱歎し給ひてある。爾れば此王は本は邪見の惡王なりしに、妙莊嚴王と申す御名は、妙法功德莊嚴諸根と釋して、妙法の功德御身をかざると云ふ至極結構なる御名にて在す、いかなれば邪見の惡王の自然とかく殊勝なる名稱を得給ふぞと申すに、向に粗談じまする通り、たとひ表は邪見の惡王たりとも、内証に昔の法華經の因縁熟して、必ず妙法莊嚴の功德を得給ふの道理窮まるが故に、靈瑞早く顯れて邪見の當處に、妙莊嚴王の御名を得給ふぞと云ふことを、其

理必臻靈瑞感通嘉名早立と釋し給ふぞと思召せ。さては當品の題號は、邪見の當體を取りも直さず妙法の功德莊嚴と顯したる邪正一如の題號で御座る。尙此上に面々我等も、萬劫流轉の中に宿習の幸あつて、一得永不失の壽量の題目を唱ふぞなれば、必ず因位の萬善萬行果地の萬徳を得ることも、其理爰に極るが故に、一文不通三毒五欲の凡身ながら、自ら妙法の功德莊嚴よと信じ奉れば、即ち善惡不二凡聖一如の題號で御座る。所詮無二の信心を勵まし晝夜怠らず、本門壽量品の南無妙法蓮華經と修行し給はゞ、頓て無作三身の妙法莊嚴を顯すこと、疑ひないぞと頼母しう思召せ。

御書

内三十一、三十、阿佛房鈔
編造一九五八

目連尊者は母の餓鬼の苦をすくひ、淨藏淨眼は父の邪見をひるがへす。此れよき子の親の財らこなる故そかし。南無妙法蓮華經

妙法蓮華經普賢菩薩勸發品第廿八

修師御述作

我於寶威德上王佛國遙聞此娑婆世界說法華經與無量無邊百千萬億諸菩薩衆共來聽受唯願世尊當爲說之

披露の御品は、二十八品の最末勸發品で御座る。時先づ當品の主旨は次上嚴王品迄に、靈山八年の法華經既に終らんとする時、普賢菩薩遙に東方より來つて、再演法華を請じ給ふ故に、當品一品の説相起るぞなれば、普賢菩薩勸發品と題するぞと思召せ。

文句

會本十末四十八

勸發者戀法之辭也遙在彼國具聞此經始末既周欲令自行化他永々無已故自東自而西來勸發

此意は、凡そ釋尊法運時至り、萬機純熟して此土他土の六瑞、彌勒文殊の問答を序分とし、五佛同道開權顯實の妙法を演説して、上根の舍利弗に華光如來の開覺を得せしめ、尙又三車大車の譬喻長者窮子の領解、三草二木の述成、終つて四大聲聞悉く佛記を蒙る上に、三千塵點劫の往昔、大通智勝佛の時大縁を結びたる化導の源を宣べ給ふ時、五百の聲聞學無學の二千人と、一同に開悟得脱し、相續きて五種法師の功德流通段の法門事起り、五百由旬の寶塔涌現して、皆是眞實の證明を加へ給ふのみならず、五逆の提婆が天王如來、八歳の龍女が即身成佛、五類の發誓四安樂行に至つて、實相の妙理益々顯はれ、修行の方軌も分明なるは、惣じて述門の説相で御座る。時に本化の菩薩大地より涌出し、開述顯本の極説を顯はし、一念信解初隨喜六根清淨不輕禮拜の妙行、悉く本門事行の功德を宣説

し給ひ、十種の神力を現じて本化の菩薩に要法を付属し、尙亦諸の菩薩の惣付属も事終れば、物の偏好に随つて藥王菩薩の苦行、妙音觀音の現身說法、五番の神呪妙莊嚴王の本事に至る迄、普賢菩薩遙に聽聞し給ふに、靈山八年虛空二處三會句句金玉を連ね、品々綿繡を展べたるが如く、開權顯實の大事、正宗流通の妙旨悉く顯れて、何事の法門何事の功德か残るべきぞなれば、遙在彼國具聞此經始末既周と釋し給ひて御座る。次に欲令自行化他永々無已と申すは、此普賢菩薩常住不變の實相周遍法界の妙理より立つて正宗流通の説相自行化他の功德を、盡未來際迄も留めんと思召すが、則ち薩埵の内證普賢の願力で御座る。今懺法の志を以て、無數の眷屬と俱に東方寶威德上王佛の國より來つて、再演法華を勸發し給ふ故に、東方而來は勿論で御座る。爾も其應迹の處終日周遍法界の内體を離れず、東方に即して十方而來而來の妙證も自ら顯るゝぞなれば、尤も一方に届すべからざる故に、自東自西來勸發と釋し給ふぞと思召せ。さては能化の釋尊は、序品以來八ヶ年の説相を以て、限りなき常在靈山の妙法を顯し給ひ、所化の普賢菩薩は、却つて此の不變常住の實證より立つて、さながら八年の法會夢の如く終らんとするを戀ひ慕はせらるゝこと、實に一部最末の要旨なれば、則ち普賢菩薩勸發品と題し、文句には勸發者懺法の辭也と御釋なされて御座る。爾れば面々方々も普賢菩薩の志を學び、本門壽量の妙法を懺法渴仰し、彌々無二の信心を以つて、南無妙法蓮華經と修行し給ふぞなれば、生死遷滅の境界に即して無有生の妙理無作三身の功德を得んこと、疑ひ無いぞと思召して、題目の御修行が肝要で御座る。

御書

内十、五十一守護國土論
縮遺二五八

法華經云若法華經行闍浮提有受持者應作是念皆是普賢威神之力已上此文意末代凡夫信法華經普賢善知識力也。南無妙法蓮華經

妙法蓮華經方便品第二

舍利弗當知諸佛法如是以万億方便隨宜而說法其不習學者不能曉了此汝等既已知諸佛世之師隨宜方便事無復諸疑惑心生大歡喜自知當作佛

披露の在處は方便品の最末、上の簡衆敦信を頌すると申す文段の下の經文で御座る。其の中に先は衆を簡び、次に信を敦むると申す二ヶ條計り訓讀致して御座れども、上の衆を簡ぶと云ふことを一向に申さねば道理が聞えませぬ程に、二ヶ條並べて共に申し談じます。時先づ大段此品に於て、此の經文の次第は如何様ぞと申すに、舍利弗等の大衆略開權顯實の説相を聽聞申して大に疑を生じ、一乘眞實の説相を頼に望み申されてあれば、時に佛五佛の章に押し渡つて、開顯の相を懇ろに示し給ひて御

座る。扱て次に今披露の經文には、唯一の妙法を深く修行せしめんと、専ら眞偽を簡び偏に信心を勧め給ひてあるに依つて、大師は簡衆敦信と分科なされて御座る。時初の簡衆と申す經文に、以五濁惡世但樂着諸欲如是等衆生終不求佛道と説き給ひて、五濁惡世の衆生は三毒強盛にして、善根轉た少く、深く世間染樂の法に着して、終に無上の佛道を求めず、此等皆天魔波旬の弟子にして、釋迦如來の眞の佛弟子に非すと簡び給ふたが今の簡衆と申す中の一つで御座る。其の上長行には、縦へ生死の法に愛着をなさすと雖も、小乗の眞空小涅槃の法に執する者は、法身の慧命を失ふ故に、終に斷見に墮つれば、之亦た眞の佛弟子に非すと簡び給ひてあれば、文句には若諸欲を樂ふは是れ魔業を行す、故に須く簡ぶべし、上の文に涅槃に著する尙ほ佛弟子に非ず、此の文に生死に著する何ぞ是れ佛弟子ならんやと御釋なされて御座る。しかのみならず、亦適ま大乘の法を耳に觸るれども、未得謂已得の輩は大増上慢の咎に墮すれば、是も眞の佛弟子に非すと簡び給ひて御座る。是が在世の弟子の眞偽を簡び給ふ意。さてまた滅後のことを次の文に、當來世惡人聞佛說一乘迷惑不信故破法墮惡道と説き給ひて滅後惡世の衆生たとへ此の法華經を聽聞し奉るとも、意迷惑せる故に信することはさし置き、却て此の經を謗し奉り、惡道に墮つれば佛弟子に非すと簡び給ふた。是が初の衆を簡ぶと申す一段で御座る扱て次に敦信之れには敦信權と敦信實の二義があります。敦信權と申すは、以萬億方便隨宜而説法と説いて、釋尊並に三世十方の諸佛一同に、衆生を利益せんがため直ちに法華經を説いて引導せんに

は根機未熟なるを以て、三五七九の機に隨つて無量萬億の方便を説き大小の益を與ふるとも、此の法を修學せん人は此等の法は悉く諸佛の方便ぞと曉め、眞實と思ふこと勿れと敦むるを、初の敦信權と申す。敦信實と申すは、法華經の信心を敦め給ふを申す。權を權と知れば實は必ず實と信ず、故に心生大歡喜自知當作佛と云ふ。佛舍利弗に告ぐ、隨宜方便の事を知り法華經に信順せよと、之れを敦信實と申します。文句に此の二信を結釋なされて實權に疑ひなければ自ら作佛を知ると釋し給ひて御座る。されば各々惡世末法に生を受けたり雖も、上行所傳の實法、妙法の信者なれば、三道を三徳と轉じ三觀三諦一心に顯れ決定成佛疑ひないぞと頼母しく思召せ。

御書

夫れ佛法に入る根本は信を以て本とす。五十二位の中には十信を本となす、十信の位には信心を初めとなす、假令へ悟りなくとも信心有らば鈍根も正見也。設へ悟りあれども信心なければ誹謗闡提也。善星比丘は二百五十戒を持ち四禪定を得十二部經を誦んせじ者也。提婆達多是六万八千の寶藏を覺え十八遍現せし此等は有解

無信の者也。今に阿鼻大城に在りと聞く。又鈍根第一の須梨槃特は智慧もなく悟もなく只一念の信ありて普明如來となり玉ふ。又迦葉舍利弗等は有解有信の者也。佛の授記を蒙つて華光如來光明如來と云はれき。佛説に云く生疑不信者即當墮惡道と云。

妙法蓮華經譬諭品第三

今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子而今此處多諸患難唯我一人能爲救護

所講の在處は、第二の卷譬諭品の一文で御座る。時に今此經文には、何事を説き給ひてあるぞと申すに悉なくも釋迦如來無虛妄の御舌を以て、我は三界の獨尊、主師親の三徳を備へて此娑婆世界に因縁深重の佛であるぞと、説き給ひたる經文なれば、別して面々我等が身に引き受けて、殊勝にしてありがたき處の金言で御座る。先其三徳の中に、第一に主君の徳を説き給ふ時、今此三界皆是我有と宣べ給ひて、欲界色界無色界の此三界が釋尊の御領所なれば、今此三界皆是我有の二句が則ち主君の

徳を説き給ふた經文の心で御座る。扱て次に其中衆生悉是吾子とあるは、此三界二十五有に生を受けたる處の群生、一類も残さず悉く是吾子なりと説き給へば、釋尊は我等が爲には親ぞと云ふ事は是れ勿論の重で御座る。

本疏

一切衆生等有佛性佛性同故等是子也。

此意は、一切衆生悉有佛性とあつて、面々我等一切衆生の内證に、無始法爾として妙覺果滿の佛性を備へ持つて居ること御座る。されば十方三世の諸佛の究竟極果の佛性と、一切衆生理性所具の佛性と、少しも替らず同體不二にして、異相なきに由つて悉是吾子と宣べ給ひてあるぞと申す事を、一切衆生等有佛性佛性同故等是吾子也と御釋なされて御座る。第三に師範の徳を説き給ふ中に、先づ面今此處多諸患難の二句は、三界二十五有六道生死の苦患を指して、諸の患難多しと説き給ふて御座る。然れば地獄は炯燃猛火の苦み、餓鬼は飢饉飢渴の苦み、畜生は共相殘害、脩羅は鬪諍人間は四苦八苦、天人は五衰退沒、惣じて死此生彼の間、一として安泰なる處なければ、次上の經文にも三界無安猶如火宅と演へ給ひて御座る。如是患難多き處の衆生にして、其性最も邪曲なれば、西方の彌陀如來、東方の藥師如來、或は妙音觀音等の大薩埵も、都て是を濟度し給ふこと能はず、唯だ本來此土の教主釋

尊御一人のみ能く教化し救ひ給ふぞと云ふことを、唯我一人能爲救護と説き給ひて御座る。さては此の娑婆世界に生を受けたる處の衆生は、一世ならず二世ならず、五百塵點劫の往昔より、恒に釋尊の慈愛を蒙り今日佛法信受の身となることも、過去遠々劫より已來の御結縁に由ることぞと思召せ。然るに末世の衆生三徳重恩の釋尊をば敬ひ奉らず、西土無縁の彌陀を仰ぎ、未顯眞實の虛説に執着して三説超過の妙經を信せず、世間出世の軌則に背きて、現世には諸天善神の守護に離れ、未來には無間大城に墮つべき道理決定する故に、次下に其罪報を宣べ給ふ時、若人不信毀謗斯經則斷一切世間佛種乃至其人命終入阿鼻獄と説き給ひて御座る。然る處に各々方々はありがたいことには、宿習深厚の幸あつて、三徳有縁の釋迦佛を頼み奉り、開迹顯本の妙法華經を信じ、朝夕不怠に本門壽量品の肝心是好良藥の南無妙法蓮華經と唱へ奉る信順の行者なれば、臨命終の夕には、三界六道の苦患を出て、四土一念皆常寂光の悟を開き、釋尊同等の佛體を感得せんこと疑ひなき一段ぞと、頼母しく思召て唱題の御修行が肝要で御座る。

御書

此文の意は釋迦如來は我等衆生のためには、親也師也主也、我等が爲に彌陀佛は主に非ず師に非ず親に非ず、獨り三徳を兼ねて恩徳

深き佛は釋迦一佛に限り奉る也。南無妙法蓮華經

妙法蓮華經信解品第四

世尊大恩以希有事憐愍教化利益我等

披露の經文の大體は如何様ぞなれば、中根迦葉等の四大弟子、此經聽聞の功德によつて、二乗空執の當所に、忽ち佛果三徳の覺體を成就し、三世了達の智見により、過去遠々劫より本師釋迦如來誘引方便を以て、御化導成させられてある次第を證知し奉るに、其御恩徳譬へゞ無量劫を経て報ずるとも報じ盡し難き大恩ぞと、佛恩深遠なるを讃歎なさるゝ時、今此經文に世尊大恩等と説き給ひて御座るさて如し是佛恩廣大なる次第を稱歎なされた經文ぞと申すことを

本疏

世尊大恩云下十三行佛恩深報難歎

此意は、迦葉等の中根の四大聲聞、昔は一文不通の凡夫にて生死の苦海に流轉してありしが、教主釋迦如來大慈大悲の内體より立つて、是等の衆生を教化教導なされて、佛果常樂に至らしめんそのために、三千塵點の其已前より、生々世々に隨從して、方便の様をかへ善巧の術を盡し、或は人天世善

の化を設け、或は二乘灰斷の道を教へ、或は善惡の理を説き給ひては邪見の幢を倒し、或は因縁和合の旨を説き給ひては、我慢の刃を推き給ふ、是等並に大事因縁の善巧方便のために設け給ふ處の大慈大悲の御恩と申すもので御座る。時先づ慈と申すは、衆生に樂を與へんと思召す意、悲と申すは、衆生の苦を抜かんと思召す意で御座る。然れば佛の初發心より已來或は尸毘王と成り給ひては鶴のため、に身を代へて鷹に施し、或は大施太子と成つては貧窮の衆生を救はんが爲に、海を汲みほして如意珠を求むる等、其外赤目の大魚となつては、五比丘の飢を除き、或は又大蛇毒龍となつては、八萬の諸虫に結縁なさるゝ等の事、如是難行苦行して偏に一切衆生をして大慈與樂大悲拔苦と申して、普く法界の衆生に結縁し、利益なされて佛果を成就せしめ給ふ、是が第一の慈悲普恩と申すもので御座る。然らば則ち如是報じ難き大慈大悲の御恩が重々にして十ヶ條まで在す所に、爰に人あつて報じ奉ることはさて置き、還つて不信謗法邪見放逸にして、此の慈悲の内體に背き奉る時は、自ら十方三世の諸佛如來の怨敵となるによつて、無間大城に墮在して、永劫の間猛火の焰に咽び、成佛の道を塞ぐ事專ら此の大恩を知らざる因縁によるぞと思召せ。然るに面々我々は宿福深厚にして生の朝より死の夕に至るまで、此の經の行者となつて意に信じ、口に南無妙法蓮華經と唱へ奉る方々なれば、釋迦如來並に十方三世の諸佛の御恩を報じ奉るのみならず、無始難斷の無明を忽に去つて本有無作の智解を開き、寂光の妙土に至り給はんこと此經信心の行者に事限るぞと頼母しう思召せ。

御書

四大海の水を硯水とし一切の草木を焼いて墨となして一切のけもの、毛を筆とし十方世界の大地を紙と定めて、詮じ置くとも争か佛の恩を報じ奉るべき、法の恩を申さば法は諸佛の師也。諸佛貴きことは法に依る。されば佛の恩を報ぜんと思はん人は法の恩を報ずべき也。南無妙法蓮華經

妙法蓮華經化城諭品第七

爾時導師知此人衆既得止息無復疲倦即滅化城語衆人言汝等去來寶處在近向者大城我所化作爲止息耳

披露の御品は、第三の卷化城諭品で御座る。時先づ當品の題號の姿は如何様ぞなれば、此品の中に初には聲聞衆三千塵點劫の往し、大通佛の所に於て、法華經を聞いて下種結縁し、此宿縁の逐ふ處、今日佛に隨つて得脱するぞと、種熟脫因縁の始終を説き給ひ、次には化城寶處の譬を以て、開權顯實

一代化導の相を顯し給ひて御座る。依之今の題號は、經家且く處中を取つて化城と題するぞと申す疏の主旨で御座る。扱て此化城と云ふ題を釋し給ふ時、

文句

化者神力之所爲、以神力故無而歎有名之爲化、防非防敵、稱之爲城。

此意は、先化と云ふは虚しき處に在つて、神通變化の力を以て忽に物の形像を現作するを化と申す次に城はシロと讀ませて世間の城郭のことで御座る。惣じて城は只將安居して讎敵を防ぎ止むるを城と申す、今此化城を構へたる其所用は、何事ぞなれば、譬は爰に貧窮の衆人怖畏艱難の處に住して困苦せしに富貴聰慧の慈人之を惑み、諸人を寶處へ引き入れ寶を興へ安穩快樂を得せしめんと思ふに彼の寶所へ行く道五百由旬にして遙に遠く、而も其の道險難にして到り難ければ、所將人衆中路懈怠我等疲極而復怖畏と申して、三百由旬を過ぎて中途にして彼の大勢路次に退屈して進むこと成り難ければ歸らんと申せし時、導師神變の力を以て方便を廻らして忽に一の城郭を化作し所將の衆人を休息せしめ疲極を救ひ給ひてあれば、彼の衆人大に喜び此の處を眞實安穩と思ふ處に導師衆人に對して此城郭は汝等が怖畏を救はん方便に現作してこそあれ、此處は永く安穩の處にはあらず、此より二百由

旬を過ぎて眞實大安樂の處ありと告げて、則ち彼の化城を滅して寶所へ入れ金銀珍寶を興へ富福自在を得せしめ給ひて、所將の衆人も歡喜を生じ導師も所望成就し給ふ、是が先譬の主旨で御座る。扱て法體に合する時、所將の衆人は三周得悟の聲聞、聰慧の導師は教主釋迦如來五百由旬の險道は五住の煩惱、亦是三界分段變易の生死、化城は則ち阿含小乘の空理を説いて有餘無餘の涅槃に住せるに譬へ、見思の煩惱涅槃の眞理に障るは敵の如く非の如く、今四住の煩惱を斷破し眞諦の理を悟るは全く城の如くなれば、本疏に防非禦敵稱之爲城と御釋なされて御座る。是れ則ち調機調養の爲に四十余年の間誘引方便の權説を設け、正しく此の法華經に引き入れ、初住八相の記別を蒙り、昔の施權不實の當處に示眞實相の寶所を示し、化城即ち開權顯實と説き給ふ御品なれば、妙法蓮華經化城論品と題し給ひて御座る。如是實所得脱の功德も初業聞常の下種に依るぞなれば、有難いことには滅後末代の面々我等も下種の法體たる本門壽量の南無妙法蓮華經と唱へ奉るぞなれば臨終最後の夕には五百由旬の險難を一步も行かず信心一念の中に打ち越えて、速に寂光の寶所に到らんこと疑ひないぞと頼母しう思召せ。

御書

妙樂大師釋云、故知無心趣於寶所、化城之路、一步不成、文不知法華經寶所同居淨土方便土淨土至也、南無妙法蓮華經

妙法蓮華經五百弟子授記品第八

今佛覺悟我言非實滅度得佛無上慧爾乃爲眞滅我今從佛聞授記莊嚴事
及轉次受決身心徧歡喜

披露の御品は、第四の卷五百品で御座る。時先づ當品の主旨は次上化城品に因縁説段を聽聞せし五百千二百の面々皆悉く切國名號の記別を蒙り歡喜身に餘り、貧人繫珠の譬を以て一化種熟脱の始末を長行偈頌に經て領解し給ひて御座る。その中に正しく訓讀の經文は偈頌の最末合譬を頌するといふ文段で御座る。

玄義

良由耽無明酒雖繫珠而弗覺迷涅槃道路不遠而言長

此意は、譬ば獨の貧人あつて、親友の家に至り酒に酔臥し前後不覺の體なるに、彼の親友官事のつとむべきあつて、酔ひ臥したる貧人の衣の内に無價の寶珠を繫けおき終に他國に趣いて御座る。其後貧人彼方此方に迷ひ衣食に艱難してかけたる珠を夢にも知らず、得少爲足と申して、少しきを得て足んぬの思をなし、淺間しき體となりはてたるに、圖らずも親友に廻り遇ひ、親友曉して我昔汝が衣の内に無價寶珠をかけおきしに、貧苦艱難にして所須に苦しむはいかにと、昔の寶珠を示されて所須に實

易し、五欲を恣にいたしたと申す譬の始末で御座る。是を法に合する時親友と申すは大通下種の導師釋菩薩貧人と申すは今得脱の五百千二百の聲聞衆で御座る。三千塵點已來無明の惑力にくるはされ、忘本所受と申して下種の妙法を忘れたる酒に酔ふて珠を覺らざる譬へ、貧里遊行と申すは四味三教を經たる姿、少しきを喜びたるは小乘涅槃の空理に執したるあり様で御座る。其の後親友彼の貧人の不覺を呵嘖し、珠を示して安穩を得せしめたるは其の空執を彈呵し淘汰して終に法華經に來つて成佛得脱して歡喜踊躍したるに譬へたる經文の始末を不覺繫珠迷涅槃道等と釋せられて御座る。然れば各面々末法相應の導師蓮祖聖人の御手より信心のはだへに一念三千の珠を繫けさせ給へば最後臨終の夕に煩惱の毒酒の醉を醒まし珠の奇特を顯はして安穩快樂の佛果を得んこと疑ないぞと頼母しう思召せ。

御書

大通結縁の輩は衣珠を忘れて三千塵點劫を經貧路に踟躕す、久遠
下種の人は良藥を忘れて五百塵點を送り三途の嶮地に顛倒す。今
眞言宗念佛宗禪宗律宗等の學者は佛陀の本意を忘失して未來無數
劫を經歷して阿鼻の火坑に沈淪すべき也。南無妙法蓮華經

妙法蓮華經見寶塔品第十一

八六

爾時佛前有七寶塔高五百由旬縱廣二百五十由旬從地涌出住在空中

披露の在處は第四の卷見寶塔品で御座る。時先づ當品題號の主旨は何様ぞなれば、次上法師品に至る迄に諸法實相權顯實の法門を演説し給ひ、相次で滅後の弘經を勧め五種の妙行自他の大益三説超過の校量を説き法を歎じ人を歎じ經卷所住の處には七寶の塔を起つべし、此經は如來の全身の舍利にてこそあれ此塔を見ることを得ては禮拜供養すべし、是人は菩提に近づくことを得るぞと衣座室の法軌を説き給ひてあれば、當品に至つて東方實淨世界の多寶如來高き五百由旬の大寶塔に乗じて大地より涌出して四王の中天に懸らせ給ふ、種々の寶を以て莊嚴し、無數の幢幡寶の瓔珞鬘々と垂れて上法身を莊り下衆生に被り、寶の鈴萬億にして伽音を鳴らし、四辯八音の妙聲を響かし、四面より出す處の多摩羅跋旃檀の妙香は四諦の道風に薫り、人天大會は種々の華香瓔珞幡蓋伎樂を以て供養恭敬し奉り、多寶佛寶塔の中より大音聲を出し皆是真實の證明を加へ給ふ、かくの如きたらくを咸く見奉る故に見寶塔品と題するぞと思召せ。

本疏

只是法華則是三世諸佛四支徵先佛已居今佛並座當佛

亦然此塔出來明顯此事四衆皆親故言見寶塔品

此意は、佛の生處得道轉法輪入涅槃の四處に寶塔を起てて供養し奉るが法式で御座る。然るに爾前四十餘年の間は權情異體の方便を設けて未顯眞實生身四所の塔にして實相法身の妙塔では御座らぬ此經は佛三種身方等より生ずと申して三世の諸佛悉く此經を以て菩提の因とし、此經に依つて佛果を究竟し給ふ、之を以て常に此の妙法華經を説いて一切衆生を利益し給ふ。聿に一期の化導極り涅槃の圓瑞を示し給ふも皆是れ三德祕藏の妙理ならぬ。誠に實相不思議因果三身圓滿の妙塔四處即一の道場で御座る。是を只是の法華は則ち是れ三世の諸佛の四支徵也と釋し給ふて御座る。久滅度の多寶如來は寶塔に乗じて涌現し給ひ、現在應化の釋尊は寶塔に入つて並び坐し給ふ、當佛亦然の道理にして三世不改法界一基の妙塔四土一念皆常寂光の妙旨凡聖一如即身成佛の極理で御座る。今佛前に涌現しては大音聲を出して如所說者皆是眞實と演べて平等大慧の妙法を證成し給ひ、大樂說菩薩は大衆の疑を擧げて寶塔涌現は如何なる因縁ぞと問ひ奉り塔中の御佛を拜み奉らんと與欲し給ふ、之に依つて十方分身の佛を集め八方へ四百萬億の國土を變じて清淨の妙土となし七寶の塔の扉を開き給へてあれば全身不散禪定に入り給ふが如く多寶佛半坐を分けて釋迦尊を請じて坐し奉り、二佛並坐し給ひて晴天に日月の並び給ふが如く、分身の諸佛は寶樹の下の師子の座の上に星の如く列し玉ふ、かゝ

八七

る折りから如來は久しからず當に涅槃に入り給ふべし、此の法華經を付屬して在ること有らしめんと流通を勧め給ふ。三箇の告勸遠く下方の空中に通徹して本化の菩薩を催し終に開述顯本の遠序となつて本門壽量の大法を顯説し給ふて御座る。多寶の全身儼然として法身の妙理を表し、釋尊塔に入つて境智冥合の報身を表し、分身雲の如く集つて應身の化用を表す、全く本有無作の三身を表顯して後の本門を引き起す所の寶塔で御座る。如是大寶塔を見奉り歡喜法樂の體たらくを一品の題號に結びたるぞと云ふことを此塔出來明顯此事四衆皆觀故言見寶塔品と御釋なさせられて御座る。爾れば各我等有難いことには是品より事起り涌出壽量に事顯れ神力屬累に事畢り塔中別付本化獨歩の弘通に値ひ奉り本門壽量品の肝心是好良藥の妙法を信受し奉る行なれば父母所生の肉身ながら本覺無作の妙體實相法身の寶塔と顯れんこと決定して疑ひないぞと信心強盛に御修行が肝要で御座る。

御書

所謂法華經本門久成之釋尊寶淨世界多寶佛於高五百由旬廣二百五十由旬大寶塔中二佛並座宛如日月十方分身諸佛高五百由旬寶樹下並敷五由旬師子座如衆星列座給四百万億那由陀大地三佛充滿南無妙法蓮華經

妙法蓮華經從地涌出品第十五

爾時佛告諸菩薩摩訶薩衆止善男子不須汝等護持此經所以者何我娑婆界自有六万恒河沙等菩薩摩訶薩一一菩薩各有六万恒河沙眷屬是諸人等能於我滅後護持讀誦廣説此經

所講の在處は、聞えまする通り涌出品の一文で御座る、此品に於て多くの分文有る中に、正しく披露の文は如來不許と申す文段の下の經文で御座る、時此の經文を如來不許と申す意は何事ぞなれば、

本疏

他方菩薩聞通經福大咸欲發願住此弘宣故請之

此意は、大體先づ述門流通の法師已下の五品の中に弘經の功深き事を説いて法師品の中には能持所持の兩歎を明し、寶塔品提婆品の二品には二ヶの告勸二ヶの諫曉を擧げて此經の弘通の功德廣大無邊なることを念頃に説き給ひてあれば持品の時二萬八萬等の大菩薩大誓願を發し頻りに弘經の望を述べ扱て安樂行品の時は身口意誓の四行に經て初心の菩薩迄も此經を弘めよと勧め給ひて有るに依つて當品の初に他方より來集せる八恒沙の數に過ぎたる大菩薩衆如來の御前に出で、申し上らる、様は我等滅後末代に於て身命を惜まず偏に此經を弘め本未有善の衆生を利益せんと大誓願を發して佛へ弘經を

望み申されて有るぞと云ふことを右の本疏に他方菩薩通經の福の大なることを聞いて咸く發願して此處に住して弘宣せんと欲する故に之を請すと釋なされて御座る。然りと雖も久成の法をば久成の人に付する道理なれば本地最初の御弟子上行等を召し出し末法護持の遺囑をなされやうとする御本意なれば右誓願を發し給ふ二萬八萬等の菩薩並に八恒沙の菩薩の弘經を止めて許し給はずと申す事を今披露の經文に爾時佛告等と説き大師は如來不許と文段を分け給ひて有るぞと思召せ。さて滅後の一切衆生は誰人の手より此經を受け如何なる菩薩の教を聞いて得脱するぞと申すに、自有六萬恒河沙等と説いて本地初成道の砌より教化示道に預りし志願堅固の大菩薩上行等は久しく此土に住し世々の間此の土の衆生に結縁深重なれば此の菩薩の教化に預る則は春を得て花開き秋來つて果を結ぶが如く一感華報の花咲き二感佛道の果を結び大風の草木を靡くが如く衆流の大海に入るが如く濁世の我等此菩薩の弘經に預り實相當住の法性の大海に入らんこと偏に此菩薩の利益無邊に依ること御座る。然れば各々は頼母しきことには彼の本化上行菩薩末法に入つて百七十一年と申すに自ら日蓮聖人と名乗り出で給ひて建長五年四月廿八日より始めて本門三ヶの祕法是好良藥の南無妙法蓮華經と唱へ出し給ふ、時機相應の修行なれば最後臨終の夕には釋迦同等の佛果を成就せんこと疑ひない一段ぞと隨分信力に住して題目の御修行が肝要で御座る。

御書

我五百塵點劫より本地の底に隠し置きたる眞の弟子有り是に讓るべしとして上行等を涌出品に召し出させ給ひ法華經の本門の肝心たる妙法蓮華經の五字を讓らせ玉ふ也。南無妙法蓮華經

妙法蓮華經法師功德品第十九

是善男子善女人父母所生清淨肉眼見於三千大千世界内外所有山林河海下至阿鼻地獄上至有頂亦見其中一切衆生及業因緣果報生處悉見悉

知

披露の御品は聞きます通り法師功德品で御座る。抑も當文の主旨は如何様ぞなれば、佛常精進菩薩に告げ給ふ様は、一切衆生の若は男子にてもあれ、若は女人にてもあれ、此の法華經の行者は父母所生の血肉不淨の是の身を取りもなほさず清淨無染の妙體と顯はし、眼には三千大千世界の内外に所ある山河大地鳥類畜類の隔てもなく惣じて有情非情の色有つて見るべき程のもをば一ト目に見開き、

毛頭もあやまたず明了に知見するぞと云ふ經文の大體で御座る。然るに其の眼根清淨の姿は如何様ぞと申すに此の法華經相似即の行者は、諸法實相開權顯實の解行を成じ三身即一の開覺に最も近づき究竟圓滿の悟に相似するに依つて、眼根に向ふ處の境界も共無非法界の妙法蓮華經にして、一物として染礙の相なく、貪著愛執の思を離れ依正自他の隔情を打ち破り眼を開き見る時は下は地獄八寒八熱の相、三類九種の餓鬼の有様修羅の鬪諍合戦の次第、人間に於ては愛別怨憎等の苦患、生老病死憂悲の有様、或は土民百姓農業耕作の體たらく、山左が薪をとり海人が漁りし、或は遠山長水の風景ある境界、春は娑婆國土の名山に色々の花咲き亂れたるを居ながら見渡し、秋は三千界の空に出づる萬億の月を同時に詠めて其の上海底龍宮界の衆生の業因果果の相迄も残る所なく悉く知見し、扱て又上は六欲四王より初め有頂天に至る迄其の内にあらゆる處の依報正報、或は四禪諸梵の禪定の行業他化化樂の歡娛の體、帝釋喜見の樂の相、惣じて欲色所有の諸天等の音樂歌舞の袂を翻し、五衰退没の苦みにあへる姿までも一事も残さず唯だ一ト目に知見するぞと云ふことを今此の經文に見於三千大千世界乃至悉見悉知と説き給ひて御座る。爾れば頼母しい事には滅後末代の各々我等が内心は、無始より已來貪欲瞋痴の游泥に染まり過去遠々より父母不淨の種子に穢れ、縦ひ四大海の水を傾けて洗ふとも清め難き處に、宿習深厚にして高祖大聖人の末弟に列なり塔中傳付の大法たる是好良藥の法水を受け持ち生の朝より死の夕に至る迄で、本門壽量の南無妙法蓮華經と唱へ給ふ行者なれば、父母所在の肉眼を

取りもなほさず清淨無垢の佛眼と轉じ給はんこと疑ない一段ぞと頼母しう思召して題目の御修行が肝要で御座る。

御書

又云、雖未得天眼、內眼力如是、已當知實經力、用肉眼令淨。

他宗所依經、都無眼用、天台法華宗、具有此眼用、南無妙

法蓮華經

妙法蓮華經常不輕菩薩品第二十

我深敬汝等、不敢輕慢、所以者何、汝等皆行菩薩道、當得作佛。

所講の在所は、第七の卷常不輕品で御座る。時先づ此の品を常不輕品と題するは何様の事ぞなれば乃往過去無量劫已前に佛在しき其の名を威音王如來と名け奉る。彼の佛の滅後正法過ぎ終つて像法の末に、獨の菩薩御出世なされ則ち常不輕と名け奉る、然るに威音王佛の御遺法法華經の深意を深く了達し、一切衆生の因分の内體に正了因緣果性果果性の三因五佛性を具足して、果智開顯の法華開法の

修行を勵ませば、終に三身圓滿の佛體を成就するぞと御覽じて、大信力を發し禮拜の行を企て、大增上慢の比丘比丘尼優婆塞優婆夷の四衆の群り集る中に至つて我深敬汝等不敢輕慢所以者何汝等皆行菩薩道當得作佛と禮拜恭敬し給ふ、爾るに彼の増上慢の四衆は、此の菩薩の慈悲願力をば曾て以て知らず、此の沙門は何國より來り、亦何の仔細あつてか斯く我等に當得作佛の記莖を授くるや、か様の僞り虚妄の授記をば曾て用えじとて、還つて瞋恚を生じ或は惡口罵詈し或は杖木瓦石を加へ彼の不輕菩薩を種々に打擲し奉ること、一年ならず二年ならず經るは經歷多年と説き給ひて、多年の間だ斯様の災難に値ひ給ひて御座れども、芥爾も恐るゝ心なく微塵もひるむ心なく遠く逃げ去り猶ほ高聲に我れ敢て汝等を輕しめず汝等當に作佛することを得べしと唱へ給ひて下種結縁をなし給ふことで御座る。其の時上慢の四衆寄り合ひて此の沙門は常に不輕人と唱ふれば宜しく常不輕と名くべしとて則ち彼の四衆の族此の菩薩を常不輕常不輕と呼び奉つて御座る。彼の常不輕者我釋迦佛なりと自らの因位の不輕の事を説せ給ふ御品なれば妙法蓮華經常不輕品と題し給ひて御座る。如是申し談ずれば釋名一科の貌も荒増し聞えまして御座る。扱て我が祖大聖人も不輕の跡を紹繼して末法の初に御出現有つて三徳祕藏の題目を弘め給へば不輕菩薩の如く或時は惡口罵詈せられ、或時は邪人の爲に刀杖瓦石を加へられ、數年の間種々の御難に値ひ給へども、我不愛身命の金言に任せて少しも恐れ給はず、御入滅に至るまで弘通し給ひて御座る。爾れば各々方々宿善甚幸にして高祖の末弟に列り朝夕不斷に本門壽

量品の南無妙法蓮華經と唱ひ給ふぞなれば、如何なる惡業煩惱も悉く斷破し、最後臨終の夕には自受法樂の境界に至り給はんこと決定して疑ひないぞと頼母しう思召せ。

御書 九七五

本門、本尊妙法蓮華經の五字、以て令廣宣流布於閻浮提、
 歟例、如威音王佛像法、時不輕菩薩以我深敬等、二十四字、
 廣宣流布於彼土、招一國、杖木等、大難、南無妙法蓮華經

妙法蓮華經陀羅尼品第廿六

說此陀羅尼品時六万八千人得無生法忍

披露の在處は聞えままする如く陀羅尼品の最末聞品得益の下を訓讀致して御座る。惣じて講者の法式として何の御品に於ても來意釋名入文解釋の三ヶの分別を申し立つる次第なれども畧を存じ唯題號の姿を一言申し談じて聽聞に備へませう、時當品を陀羅尼品と題し給ひたるは何事ぞと申すに、五番の神呪と申して、藥王勇施多門持國十羅刹女等各佛前へ進み出で末代惡世に法華經を弘通致し受持讀誦

解説書寫する者に種々の災難が來り、惡鬼魔王が障りを成し、修行を退轉せしめん其時我等行者を擁護し不祥の災難を拂ひ安穩に弘通せしめんとの大誓願を發し諸佛祕密の神呪陀羅尼を述べ給ふた御品なれば陀羅尼品と題し給ひてあるぞと思召せ。

本疏

此翻惣持惣持惡不起善不失

此の意は、陀羅尼と申すは天竺の語此方の語には惣持と申すぞと云ふことを此翻惣持と釋し給ひて御座る。先づ惣持の二字をばスベタモツと讀ませた文字、何物をすべたもつと申すに、其持つ物を擧げ給ひて、惡不起善失不と釋し給へり、此の意は、善惡の二法ともは惣持つと申すことで御座る。さて此善惡の二法を十界に約して分別する時、地獄餓鬼畜生修羅人天此の六道界を惡と申す、聲聞緣覺菩薩佛の四聖は高下の不同はあれども同く斷惡生善の法なれば通じて善と申すことで御座る。亦極めて論ずる時は始め地獄より終り菩薩界まで無明の根本未だ傾かざれば惣じて惡法と云ひ、唯第十の佛界耳諸善の頂きにて之を過ぎたる善法無きに依つてひとり善法と名り、惑智相對して云ふ時は、見思塵沙無明の三惑を惡法と云ひ、一切智一切種智道種智の三智を善法と申す、時何と云ふ仔細あつて善惡共惣持つと申すに、祕密陀羅尼の内體は九界染得の惡法佛界清淨の善法と相離することなく、十

界平等染淨不二なれば一法を去り一法を持つと云ふことなく、善惡の二法俱に持つぞと思召せ、三惑三智と申すも、智と離れて別に惑起るにも非ず智も亦惑を離れて別に發するにも非ず、唯一實相にして通用寂滅の法なれば二法の差別なく融妙不二にして三惑の全體一毫も動せず三智の正體全く三惑にして平等大慧の妙法なる故に惡起つて善を妨げず、善も又惡に失せられることなく、善惡相即して能く惣持つ故に惣持と申すぞと思召せ。然る則んば外より來る處の魔王魔民の災難を始めとして、怨嫉病患等の諸難全く陀羅尼の所具にして通用寂滅の法なれば何物か來つてさわりをなし、何者か之に惱むべき道理なけれども、而二常差別の日は染淨の二緣起ることあつて十界の差相寂然なれども斯の内體融妙の理を解せず、差別に執して隔情を謂ひ自他の偏頗煩にして三千融妙の妙體に迷ひ無始より已來種々の災難に値つて身心俱に苦むことで御座る。然るに信力堅固に此法華經を受持をする者に種々の災難が來るとも、其の災難を拂ひ受持の者を擁護せんと大誓願を發し二聖二天十羅刹女等各陀羅尼神呪を設け給ふた御品なれば妙法蓮華經陀羅尼品と題し給ひて御座る。然らば各々方々は頼母しきことには信力强盛に本門壽量の是好良藥南無妙法蓮華經と唱へ奉らば五番神呪の擁護に依つて現在には不祥の災難を拂ひ一息切斷の夕には寂光の實刹に至んことは疑ひないぞと思召して唱題の御修行が肝要で御座る。

法華經行者諸菩薩人天八部等二聖二天十羅刹女等千一ニ來守護シ玉ハ
 侍上釋迦諸佛ヲ奉リ下九界ヲ失フ行者必不實ナ智慧愚シ身不淨ク
 戒德備フ南無妙法蓮華經と申さば必ず守護し給ふべき也 南無妙
 法蓮華經

妙法蓮華經陀羅尼品第廿六

說此陀羅尼品時六万八千人得無生法忍

披露の御品は、第八の卷陀羅尼品で御座る。時先づ當品の大體は如何様ぞなれば、惡世弘經喜惱難
 多釋して末代惡世に於て諸經の肝心諸佛の祕要の妙法を修行せんには必ず無量の怨嫉來り、惡鬼羅刹
 の障りあらんことを思召し、藥王勇施多門持國鬼子母神十羅刹女各佛前に進み出で、以呪護之使道流
 通と有つて、俱に諸佛祕密の陀羅尼神呪を説き給ひ、是を以て行者の災難を拂ひ、遍く妙法華經を流
 通せしせんと誓ひ給ふ御品なれば、妙法蓮華經陀羅尼品と題するぞと思召せ。

文句

此翻惣持惣持惡不超善不失

此意は、陀羅尼は梵語此方之語には惣持と申します。然るに惣持とはスベタモツと云ふ文字なるが
 何物を惣へ持つぞと申すに、惡不起善不失と申して、遮惡持善が惣持の義で御座る。譬へば塀や垣な
 どの能く内の物を持つて出さず亦能く怨賊強盜を防いで俱に用心と成るが如く、此の陀羅尼を得る則
 んば、萬惡悉く起らず衆善永く失せざるが故に惣持と名るぞと云ふ釋の意で御座る。時に五番善神
 呪を説き給ふことは、全く妙法之修行を護り不祥の災難を拂ふ爲なるが、元來此の遮惡持善の陀羅尼
 は其の體何物ぞと尋ぬるに、是則ち眞如實相に安住する佛智の徳用と見えます。爾るに一切の惡と
 云ふ物は必ず迷情の心より起つて、偏屈の情を體とする物で御座る。更に萬法の本性融妙なるを知ら
 ず只差別の假相を取つて三毒五欲を深くし、殺盜姦妄之四重乃至無量の重罪をも作り彼に怨を結び是
 に愛著を生じ、三途に沈淪し五道に流轉する皆是れ惡の有様で御座る。爾るに暗夜の怪樹も其本體を
 知れば惑はされぬ様に、萬法の本性中道實智之妙用たる此陀羅尼を持ち奉る則んば一切の妄想も自然
 に解ること御座る。所詮惡行は暫らく盛なれども、永く善根を覆はず無明の力大なれども終に法性
 に斷せらるゝ道理なれば彼の無明の眷屬たる惡鬼羅刹の災難に向つて此の法性の徳用たる陀羅尼を誦

するに草露の朝日に消ゆるが如く、忽に消滅し、妙法修行之功德は日夜に増進すること御座る。然れば各々我等宿善厚うして無量劫にも値ひ難き壽量品の題目を唱へ奉るぞなれば今生には五番善神の擁護に預り無量の災難を拂つて彌々信心を増進し未來には決定として成佛の素懐を遂げんこと、頼母しい一段ぞと随分信心に住して題目の御修行が肝要で御座る。

御書 前出。

明治三十四年五月二十三日初版發行
昭和六年四月十八日再版印刷
昭和六年四月二十三日再版發行

編輯兼 發行者 法華宗學林

東京府瀧野川町田端百十三番地

代表者 佐々布正海

東京市本郷區本郷六丁目一番地

印刷所 速成堂印刷所

版權
所有

終

